

義と利——中洲義利合一論の性格解明のために——

松川健二

まず手続きとして、中国では宋代以降、日本では江戸期の、義利の辨に関わった五十家を抽出、その主だった言説の若干を俎上に載せた。

即ち、『論語』では「君子喻於義、小人喻於利」(里仁篇)、「子罕言利与命与仁」(子罕篇)など、『孟子』では「王何必曰利、亦有仁義而已矣」(梁惠王上)など、『大学』では「不以利為利、以義為利」(伝之十章)など、「義」・「利」両概念が相い対する語句に就いて、それぞれの思想家が示した反応のいくつかを扱うこととしたのである。五十家は大きく三つのグループに分け得た。第一に義利峻別、第二に義先利後、第三に利重視。

第一グループの双璧は、南宋張栻の「為にする所無くして之れを為す、之れを義と謂ひ、為にする所有りて之れを為す、之れを利と謂ふ」と、同じく陸九淵の「人の、利に

従事して更歷すること之れ多く、講習すること之れ熟すれば、安んぞ喻る所有らざるを得んや」。朱子学の用語辞典である陳淳『北溪字義』は「孺子入井」と「内交要譽」をそれぞれ「義」と「利」に配したが、陽明学の旗手王畿「白鹿洞統講義」は「嘽蹴不屑」と「不辨礼義而受之」の例を増し加え、日本古学の伊藤仁斎は「大学非孔氏之遺書辨」を残すなど、この義利相反の主張は学派に片寄るものではないことを明らかにした。

次いで、朱熹が『孟子』首章の「未有仁而遺其親者也……」に関わって、程頤を承けつつ「此れ仁義未だ嘗て利ならずんばあらざるを言へり」(集注)とし、これに、例えば明の蔡清が「此の利は是れ仁義中の利にして天理の公也」(四書蒙引)とコメントしたように、朱熹思想の本流そのものは、決して義利峻別ではなくて、義先利後というべきもののな

であり、利を全く考えない立場と、結果として生じた利はこれを排除しないという両者の相違は明確であることを指摘した。

第三の利重視のグループの代表例には、明の呉廷翰「義を舍きて利を言へば必ず人欲陷溺の危有り、利を舍きて義を言へば、亦天理自然の安無し」を据えた。中洲が陽明学を気学と規定する思考回路の中には、廷翰—仁斎—中洲という影響関係が観測されるが、義利の辨に在っても、廷翰の存在は軽視できぬと考えたからである。一方、山田方谷は明らかに義先利後であり、中洲はこのテーマに関しては系譜を異にすること、また付随して中洲と中江兆民「論公私利私利」との差異にも論及した。

総じて、『大学』末章を重視し、『孟子』首章を、私利を排し公利即仁義を勧めたものと解し、『論語』子罕章の「利」を『易』の語で解し、喻義章を「義は利中の条理」の枠組で解する中洲は、利重視に入るのは当然として、史上の「双行」「互用」「両得」などの称谓と「合一」はどう関連するか、更めて論ずることとした。

(二松学舎大学客員教授)

南洲百話

山田 準 著

「児孫のために美田を買わず」と詩に詠い、至誠を尽して無欲に生きた南洲西郷隆盛の人間的魅力を南洲に私淑した著者が、数々の逸話を交え、その真髓を語った好読物。

B六判 一六二頁 本体一、二〇〇円(税別)

言志録講話

山田 準 著

西郷隆盛が愛読した一斎の言志録中の百一条から、更に十五条を抽出して平明に語った言志録講話に、王陽明の生涯を印象深く描いた王陽明物語を付した人間学読本。

B六判 一四六頁 本体一、二〇〇円(税別)

伝習録講話

山田 準 著

伝習録を読まずして王陽明の思想を語ることはできない。本書は伝習録を本文の順に従い解説したもので、陽明学講話と併せ読まれるべき書。昭和十年刊の名著の再刊。

B六判 一三九頁 本体一、八〇〇円(税別)

発行 明德出版社